

Title	戦前期の大阪商科大学杉本学舎の状況および周辺地域の変遷
Author	松本, 裕行
Citation	大阪市立大学史紀要. 9 巻, p.1-29.
Issue Date	2016-10
ISSN	1884-3522
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学史資料室
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171208-007

Placed on: Osaka City University

《論文》

戦前期の大阪商科大学杉本学舎の状況 および周辺地域の変遷

松 本 裕 行

はじめに

本稿は、戦前期の大阪商科大学杉本学舎とその周辺地域の様相について、各種の資史料を用いて明らかにしようとするものである。本学がある現在の杉本は明治・大正期には依羅村に属していたが、のちに住吉区に編入された。当時の杉本の地域には典型的な農村地帯の風景が広がっていたが、昭和期に入って鉄道敷設や土地区画整理事業が始まり、商大学舎が移転するという変化の時を迎えた。この明治・大正期からアジア・太平洋戦争の終結直後の期間に限定して、当時の商大杉本学舎の状況、および杉本の地域の地理的景観の特徴と変遷を具体的に提示することが本稿の目的である。その素材として、当時の関係者の記憶をまとめた記念誌や文集といった諸文献に加え、新聞記事や当時の風景が撮影された写真、あるいは空中写真を積極的に活用し、戦前期の住吉区杉本と商大杉本学舎の在りし日の姿を再現するといった構成を行っている。

現在の大阪市立大学は大阪商科大学を前身とする。戦後は、占領軍による杉本学舎の接収に伴う流転の歴史を経験したが、接収解除後は返還された杉本学舎を基盤に総合大学として発展してきた。これを戦後以降（新制時代）における本学の現代史とするならば、天王寺区烏ヶ辻から住吉区杉本町へ学舎が移転し、終戦を迎えるまでのおよそ10年間の杉本の時代を戦前期（旧制時代）における本学の近代史の1つとして捉えることができよう。戦後、大学施設や杉本の地域も大きな変化を遂げてきたことは言うまでもないが、その原点である戦前期杉本時代、すなわち商大杉本学舎の移転前後からの歴史的事実を明確にしておくことは、占領期から現代に至るまでの本学と住吉区杉本の発展過程をよりよく知る上での、時間・空間の基軸になると考えられる。

なお、本学のキャンパスは「杉本町学舎」と呼称されることがあった。しかし、住居表示の変更により現在は「杉本町」から「杉本」となっている。よって、本稿では混乱を避けるために「杉本学舎」という表記に統一している。

また、本稿の補足資料として、諸文献から当時の思い出が綴られた記録を収集・抜粋し、これらをいくつかの項目に分類したうえで「大阪商科大学杉本学舎とその周辺地域に関する記録」と題して掲載した。本稿および補足資料に掲載している記録文は、特に注釈を加えない限りそのまま抜き出して掲載している。

1. 杉本町前史

最初に明治・大正期の杉本を含む周辺がどのような場所であったかを解説しておく。1922(大正11)年に刊行された『東成郡誌』を主な素材とし、商大移転や鉄道敷設、近代的都市計画の影響を受ける以前の地域の様子を垣間見ることにする。

(地勢・産業)

現在の住吉区杉本は、かつて依羅村の一部であった。『東成郡誌』では、その依羅村の地形および地質について次のように述べている。

地勢及地味

一帯の平野にして高低の差極めて少なし。然れども仔細に之を觀察すればや、丘陵状態をなせる大字杉本字森(村の南部)の山林に於て、海拔四十五尺五寸[約13.8m]、耕作地の最高たる大字山之内字内山(村の西部)に於ては三十一尺[約9.4m]、最低地の大字苜田字垣外(村の東部)に於て十四尺[約4.5m]なりとす。

役場學校所在地は本村大字我孫子字美濃邑三十八番地にして、殆んど本村の中央に位し、海拔三十尺[約9.1m]とす。地味、土質は砂質壤土にして、有機物(中性腐植質)に富み、米麥蔬菜根菜類の栽培に適す⁽¹⁾。

依羅村は上町台地の南端に位置し、若干の高度を有する台地が広がる地域であった。この頃は鉄道も道路も未発達で交通の便はよくなかった。「本村は交通稍不便にして比較的大都市に離れ、且つ人口稠密ならざれば、工業商業の如きは全く発達せず、唯土地肥沃にして、農業の盛に行はるゝのみ」⁽²⁾とあるように、典型的な都市近郊農業を主体とする産業形態をなしていた。商工業の類は有してもそれは農家の副業程度に過ぎず、庭井や杉本の大和川河岸では豆砂利の採集がさかに行われ、それは道路修繕用の資材として活用されていた⁽³⁾。

また、依羅村を含む一帯では、江戸期よりさかんであった綿作や菜種栽培が近代以降になって徐々に衰退していった。前者は機械紡績業の発達による外国産綿花の台頭、後者は灯油ランプの普及による需要減退によるものであった。この結果、商品作物を多角的に栽培するという収益性の高い農業経営から米や麦といった栽培に転換することを余儀なくされ、農産業の有利性を減退させていった。水利の問題により綿作から稲作への転換が容易ではなかった農家では、芋や黍といった収益性の低い穀物の栽培に転換せざるを得なくなった⁽⁴⁾。

(1) 『東成郡誌』p.1473より。文中の[]内の数値は、筆者が換算して挿入したものである。

(2) 同上書p.1490より。

(3) 同上書p.1480より。

(4) 『依羅郷土史』pp.115-119を参照。



図 1-1：地形図（大正 11 年）

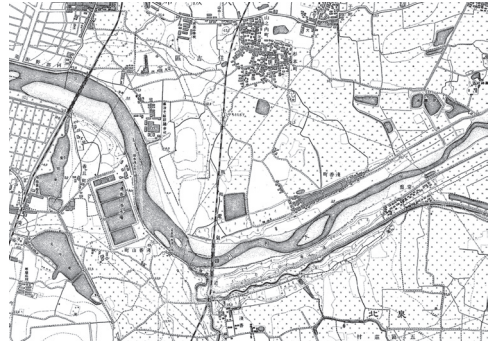


図 1-2：地形図（昭和 4 年）

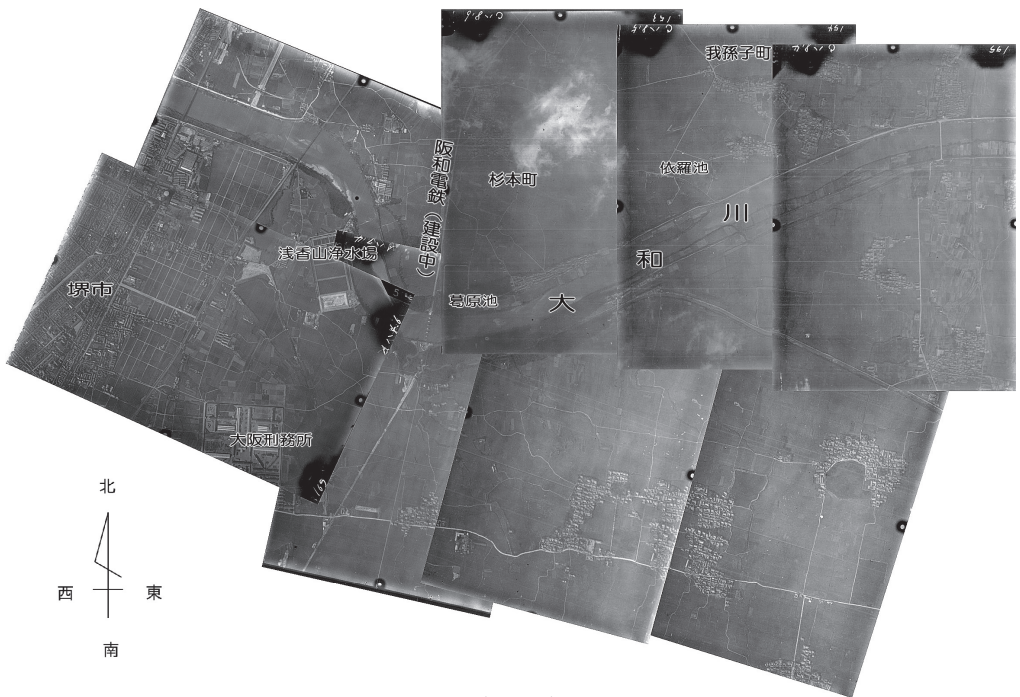


図 1-3：1928（昭和 3）年の空中写真

図 1：旧依羅村周辺の地形図と戦前期空中写真

(注) 図 1-1：1 万分の 1 地形図「堺東部」陸地測量部、1922 年発行。図 1-2：1 万分の 1 地形図「堺東部」陸地測量部、1931 年発行。図 1-3：大阪市「大阪市航空写真（昭和 3 年）一括」より。空中写真は地形図と比較できるようにするために、筆者が数点の空中写真を選んで合成加工し、その上加筆したものである。なお、写真縮尺は 8 千分の 1 である。

当時の地理的景観を図 1 を用いて解説する。図 1-1 は大正期の地形図で、依羅村を中心にトリミングしたものである。阪和電鉄はまだ開通しておらず、現在の杉本学舎がある土地には田畑が広がっていたことが分かる。図 1-2 は同じ範囲をトリミングしたおよそ 7 年後の昭和初期の地形図であるが、阪和電鉄が開通し、図 1-1 と比較して溜池が多く見られる。地形図の中央

部に四角形が見えるが、これは葛原池くずはらであり、商大杉本学舎敷地内にあった溜池である（後述）。

図1-3は、大阪市によって1928（昭和3）年に撮影された空中写真である。写真では阪和電鉄が建設途上にあり、大和川に架かる大和川橋梁の橋桁のみが見える。写真には葛原池や依羅池も見えるので、その位置を示しておいた。また、地形図でも確認されたように商大杉本学舎となる土地には田畑が広がっており、本格的な土地区画整理事業が行われる前の状況が把握できる。この空中写真が撮られた後に土地区画整理事業や鉄道敷設、そして商大新学舎の建設という出来事が相ついで起こり、杉本の周辺地域は大きく変化する。この空中写真は、その変化が起こる直前の地理的状況をありのままに見ることができる貴重なものである。

（地名）

杉本という地名は依羅の森に、あるいは藤原定家の歌に由来するものと端的に解説されていることが多い。『東成郡誌』によれば「大字杉本は枕歌に大依羅神社の神域にある森は松杉とあれば、此樹に限りて多く繁茂せしを以て、定家の歌にも「松と杉とや千年榮えむ」とあるなり。されば之に縁みて起りたる名なるべし」⁽⁵⁾と少し詳しく述べられている。また別の文献では「住吉区の南端、大和川右岸の台地は古くは依羅原よさみはらといい、三国ヶ丘みくにがおかからつづく浅香原あさかはらの杉林で知られたが、豪族依羅吾彦よさみあびこの住地にちなむ我孫子あびことも呼ばれ…」⁽⁶⁾とも述べられており、依羅原の名称を紹介している。

（人口と家屋）

依羅村の人口については『東成郡誌』の統計資料によれば、明治・大正期には戸数600戸前後、総人口3,000人台で推移している。1918（大正7）年の記録では、戸数621戸、人口3,430人となっている⁽⁷⁾。家屋は杉本・山之内・我孫子に瓦葺の木造家屋が多く、同年の記録では、平屋居宅411戸、2階建居宅8戸、倉庫20棟、雑倉268棟と記録されている⁽⁸⁾。

（水利用の状況）

古来より依羅の周辺は狭山池から取水して耕作を営んでいた。だが、江戸期の和川の付け替えによって状況は一変した。工事により依羅から堺に続く土地が川床に供されて潰地となった。これにより新大和川をはさんで土地が分断され、依羅の耕作地帯は狭山池からの取水が不可能になった。依羅池はその中央部が新大和川の流路となったために東西に分断され、その面積は著しく縮小してしまい新大和川の北側にわずかの面積を残すのみとなった。新大和川の出

(5) 『東成郡誌』p.1477より。なお、この定家の歌は『拾遺愚草』にあり、全文は次の通りである。「君か代はよさむの杜のとことばに松と杉とや千たひさかえん」

(6) 『日本地誌』第15巻（大阪府・和歌山県）、p.193より。

(7) 『東成郡誌』p.1478より。

(8) 同上書p.1508より。

現は、依羅の耕作地帯の水利用をさらに困難に至らしめる結果となった。というのも、依羅の地は上町台地の南端に位置することから地形的には高台にあり、近世初頭（おそらくそれ以前）より「旱損かんそんの土地柄」と称されるほど元来農業の水利に恵まれず、旱害の起こりやすい土地であった。新大和川の川床は耕地よりも低かったために川の水を容易には引けず、溜池や井戸からの取水に頼るほかなかった。近世において、干ばつ時に溜池や井戸が涸れるようになると、非常手段として踏車によって大和川の水を文字通り掻き入れるようにして対処したという。1819（文政2）年の記録によれば120挺の踏車が備えられていたとあり、また1855（安政2）年の記録によれば、干ばつ時には日雇いで労働力を集め、村をあげて必死に渇水対策を行ったという⁽⁹⁾。近代に入ると揚水ポンプを導入し、河水を大和川から取水して溜池に充填できるようになった。その後、溜池を潰して水田にする、あるいは池を拡張するといった耕地整理や揚水ポンプの蒸気機関から電動機へといった設備の更新を行いながら、農地の改良と水利用の効率化を進めていった⁽¹⁰⁾。

なお、『東成郡誌』の記述によれば、依羅村の井戸水は水質が悪く、飲用水としては適さなかったようである。「俗に黒金氣くろかなげと稱するもの多し」とあり、これは金属成分を含んだもので臭みがあったとされる。とりわけ200戸余りある杉本新田には井戸が3本しかなく、またその水質も前述のように悪かったため、飲水は井戸に頼らず大和川の水を利用したそうである。この頃の大和川は流れが速く、水質も良くて飲用に適したとされている。「傳染病とは何等の干繫なし」ということで、当時の大和川の水質はそれほど良好であったらしい⁽¹¹⁾。現在では想像しえない大和川河川水の飲用水への利用の様子がうかがえる。

（区域の変遷）

依羅村は、1889（明治22）年の町村合併により、堀村・前堀村・寺岡村・我孫子村・荻田村・庭井村・山之内村・杉本村・杉本新田が統合して成立した⁽¹²⁾。これにより自然発生的な地名であった依羅が、行政区画の地名として登場する。しかし、1925（大正14）年の大阪市の第二次市域拡張によって依羅村は大阪市住吉区に編入された。この時、大字杉本は杉本町に、大字杉本新田は浅香町となった。この編入に際して依羅村では反対運動が起こり、大阪府知事

(9) 『依羅郷土史』pp.61-65を参照。

(10) 区画整理と揚水装置の設置を主な目的とした1911（明治44）年の「依羅村杉本耕地整理組合」による事業からである。杉本では1849（明治27）年に山野庄造氏が私財を投じて、大和川に蒸気機関による揚水ポンプを設置しており、これは大阪府下では先駆的な試みであったということで、山野家にはポンプ設置の記念碑が建てられたという。同上書 pp.123-126を参照。

(11) 『東成郡誌』pp.1480-1481、p.1484を参照。なお「黒金氣」とは、マンガンの成分が含有した水質を表す。「干繫」は「関係」の当て字である。

(12) 1896（明治29）年に依羅村の一部を分割して長居村が成立している。当初、住吉郡依羅村であったが、この時に東成郡と住吉郡が合わさって東成郡が発足し、依羅村はそこに所属することとなった。なお、杉本新田は新大和川の開削により荒地となっていた土地を開発したものである。

や関係省庁に対して陳情を強く行った。純粹に農業を営む地域であるので市域に組み入れられて都市施設を設ける必要性はなく、また編入によって地元住民の本来の生活と気風を損なう恐れがある、ということが主な理由であった⁽¹³⁾。この頃、全国的に市域拡張による町村合併が積極的に行われており、大阪市もその例外ではなく、多くの町村を合併の対象としていた。依羅村はその中で最後まで強硬な反対運動を展開して内務大臣への陳情も行ったが、運動の甲斐もなく強制編入された。こうして、現在の杉本学舎のある地域は大阪市住吉区杉本町となった。ちなみに、現在の表記は住吉区杉本となっているが、これは1981(昭和56)年の住居表示の実施によるものである。

以上で述べたように、明治・大正期にあっても、杉本を含む依羅村周辺は、見渡す限りの田園風景が広がっていた。膨張する大阪市域の影響が徐々に迫りつつも、典型的な近郊農業地帯として農村集落が点在していたという光景は、これまでに示した文献資料や図からある程度は想像できるだろう。図1において地形図と空中写真によって当時の地理的景観を示したものの、当時の依羅村の田園地帯を撮影した風景写真をいまだ見出せてはいない。だが、大和川が前述の通り文字通り清流であった様子や、大依羅神社やその近辺にあったであろう鬱蒼とした森の群落が写りこんでいる大和川河川敷を撮影した写真があるので、参考として下に掲載しておくことにする。



図 2-1：大和川と浅香山（大正末期）



図 2-2：大和川を渡る阪和電鉄（昭和初期）

図 2：大正末期と昭和初期の大和川の風景

(注) 図 2-1・2：『写真でみる住吉区のあゆみ』（2005年）より転載。図 2-1 の右に見える森が浅香山である。図 2-2 において、右が浅香山で左が杉本と推測される。

(13) 『南大阪編入記念誌』 p.361 には、「…目下純農村なれば市に編入せられて都市的施設をなすの要なきのみならず市に編入せられんか従來の村民の純樸なる美風を失ふの懼れありとなす」と記されている。

2. 商大移転と周辺の変化

大都市近郊の農村地帯であった依羅村の地理的景観が大きく変化するのは、昭和期に入ってからである。1929（昭和4）年7月、阪和電気鉄道（現・JR 阪和線）の天王寺から和泉府中の路線（鳳から阪和浜寺の間も含む）が開通し、同時に杉本町駅が開設された。また、大阪市による高速鉄道（大阪市営地下鉄1号線のことで現在の御堂筋線）の建設計画が1928（昭和3）年に認可され、1930（昭和5）年より着工することになった。この新線は我孫子町まで延伸する計画となっていた。これらに加えて大阪商科大学の新学舎の建設候補地という話も持ち上がり、依羅村一帯は大きな転機を迎える。商科大学新学舎建設の候補地は幾つか挙がっていたが、1928（昭和3）年3月に住吉区杉本町と決定し、1929（昭和4）年4月には当地で地鎮祭が執り行われた（図3）。



図3：新学舎用地での地鎮祭の様子

（注）大学史資料室所蔵の写真より。図中の一番上の写真「新商大敷地全景」は、『大阪商科大学六十年史』（1944年）のp.363にある「新学舎地鎮祭式場」と題した写真とほぼ同じである。その写真には「學内用水池堤上より望む」という注釈があった。用水池とは、当時の大学構内にあった葛原池と思われるので、敷地の全景写真は池の堤の上から北方面を撮影したものと考えられる。

当初の新学舎建設計画では、1931（昭和6）年までに商大の全施設が完成する予定であった。しかし、土地の買収に困難を極め、実際の着工は本来の計画において完成を予定していた年、すなわち1931（昭和6）年10月からとなり、完全竣工は1935（昭和10）年2月にずれ込むことになった。新学舎建設を大幅に遅延させた土地買収問題は、地元の地主と小作人による反対運動が根強かったことに起因している。その反対についての主な理由は、耕作地を失うことによって生ずる生活への直接的影響であったが、一方では学校の設置では十分な経済的発展は望めないという意見もあったという⁽¹⁴⁾。農家の死活問題という背景から反対運動は強力なもので、解決に至るまでに市側は大変な労力を要した。この「商大移転争議」の顛末について『依羅郷土史』では、次のように述べられている。

五年（1930年）三月には買収済みの土地の地均し工事が行われていたのにたいして、反対派の小作人七―八〇名が工事現場に座り込みを行い、ついに賛成派との間に乱斗事件が起り、これに浅香山に陣取って警戒にあたっていた警官隊が調停に入るなど険悪な空気

(14) 『依羅郷土史』p.156を参照。

となっていた。五年九月土地収容審査会^(ママ)の解決を経て、ようやく同年一一月にいたって予定地全部の買収を完了することができた。

また買収地の小作関係も、三年(1928年)五月から五年一一月までに協議によって小作明渡しができしたのは一〇六八四坪で、小作関係地の四割が解決したにすぎない有様であった。翌六年(1931年)四月には、反対側の小作人が牛二五頭をひいて大阪市役所に大挙デモを行ったり、六〇名の同盟休校まで起こった。最後に小作権収容裁決によって五年九月四七八坪、六年三月一四七八五坪の小作権が収容され、同年七月にいたって最後の協定がようやく成立したのである⁽¹⁵⁾。

この争議の期間を含め、商大新学舎建設候補地の杉本町への決定から着工に至るまでの間、学舎用地の設定と建物の配置はどのような構想であったのだろうか。この点については木方十根氏による論文「大阪商科大学学園計画の都市計画上の位置づけについて」(日本建築学会計画系論文集・2004年)と、この大阪商科大学の事例を含めた同氏による著書『「大学町」の出現—近代都市計画の錬金術』(河出書房新社・2010年)の中で詳細にまとめられている。同氏の論考は、大学キャンパスの設置計画が都市計画上においてどのように位置づけられるかに焦点を当てているものである。大阪商科大学の事例では、予定地の変遷模様を当時の図面史料を用いながら具体的に解説されている。同氏は大阪商科大学の新学舎建設に関連するこれら一連の事業が、大阪「市」によって執り行われていたことに注目している。すなわち土地買収、損失補填、土地収用の業務(土木部など)、区画整理と街路計画(土木部計画課)、キャンパス計画ならびに施設設計(土木部建築課)、これらに加えて高速度鉄道計画といった諸事業が、大阪市独自で推進されてきたという点である。同じく都心部から郊外へ移転を進め、民間土地開発会社の開発と連動して新学舎を建設した東京商科大学の事例と比較しても、商大杉本学舎建設の過程には顕著なものがあると指摘している。つまり大阪商科大学の場合、新学舎の構想と具体化は、関一による「自由空地論」および大阪市による「大大阪緑地理想計画」といった一貫した計画理念、そして強い事業推進力によって繰り広げられており、日本唯一の市立大学の創設を含めた近代大阪の都市政策の進展の上で初めて成立したものであったこと、そして日本の大学町の歴史的展開において独特の意義を持つ事例であったことを明らかにしている⁽¹⁶⁾。

現在の杉本を含む周辺地域にみられる土地区画は、「商大付近土地区画整理組合」による整理事業の結果である(図5-1・2)。こうした土地区画整理は、最初は耕地整理として大阪市の各地で行われていたもので、その目的は利用に不便な従来の未整形な道路や水路などを効率的な形に整備し、有効な土地利用に資することであった。その後、宅地造成を見越した内容となり、都市計画という位置づけで区画整理が行われるようになった。商大新学舎は、そうした土地区画整理事業と関連して建設されていくのだが、その間に新学舎の用地設定や建物の配置に

(15) 同上書 pp.156-157 より。

(16) 『「大学町」の出現』 p.160 および pp.186-187 を参照。

については何度か修正が試みられている。この点については木方氏の著作の中で詳しく解説されている。ここではその説明を省くが、商大新学舎の予定地は阪和電鉄より東にまとめて計画されるようになり、用地の位置は微妙に変化するものの、葛原池を含む学部の用地とその北東に予科・高商部の用地という2区画の設定で具体的に建設計画が進捗していく。大学史資料室には当時の計画案に関する史料として、1934（昭和9）年に臨時校園建設所によって作成された簿冊「商科大学関係測量図綴」が所蔵されている（図4-1・2）⁽¹⁷⁾。また、予定段階の計画図を参考に描かれたと思われる空撮を模した挿絵（完成予想図）も存在しており（図6・7）、それらの内容から学舎建物の配置も現在とは幾分異なっていたことが分かった。これらに他の史料も加えて杉本地区の変遷過程と商大新学舎の構想の模様について分析を加えてみることにしよう。

図4-1は、土地買収の状況を把握するために作成されたものと推測される。土地所有者と耕地の位置を示したところに、商大新学舎の用地の区画と、建設予定の建物の位置と形状が書き込まれている。学舎用地となる2区画の位置は現在と似ており、図中にaと示した葛原池が学部の用地の中で大きな面積を占めていることが分かる。この図の特徴としては、c・d・eに示すように、学舎建物の位置が現在とは異なっていることが挙げられる。各建物は用地の端に設定されており、学部本館は用地の北寄りに、予科・高商部校舎は用地の西寄りに配置されている。この図にあるような建物配置に沿った形で描かれた挿絵が、1929および1930（昭和4および5）年に発行された「大阪商科大学一覧」の中に完成予想図として掲載されている（図6）。これを見ると、建物は大学敷地に面した道路に迫るような形で配置されており、その背後に中庭やグラウンドが広がっている。また暖房汽罐室は高い煙突を聳えさせながら、学部本館の背後に1棟と予科校舎および高商部校舎が並んだ中央に1棟の計2棟が描かれている。この図6は幻の商大の風景といえよう。

図4-2は、土地区画整理の予定図の上に商大の学舎の用地区画が示されたものである。商大用地の2区画の位置は、現在とは微妙にずれている。阪和電鉄の西側に沿って走る道路（図4-2中で「北畠浅香山線」と表記されている道路）と、現在の本館地区の北側を通る道路とが交差するところでは、中央に三角形の島を有する丁字路（三叉路）になっている。図6では、その丁字路が挿絵中の右端中央に見える。この丁字路は、図5-2の区画整理後の状況を見ると実施されなかったことが分かる。また図7では、現在とほぼ同じ学舎と諸施設の配置が見られる。この配置は図8と同一であり、図中に用いられた建物配置の平面図の部分が図7の左上には

(17) 大学史資料室には2000（平成12）年に当時本学大学院生活科学研究科の講師であった中嶋節子氏（現・京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）より史料の由来について解説がなされた調査記録が残されている。その内容をまとめると次のようになる。臨時校園建設所は1934（昭和9）年の室戸台風により被害を受けた大阪市内の小学校を建て替えるために設置された臨時の組織である。職員には商大用地買収の際に関係する者も入っていたと思われる。史料の作成年には、すでに商科大学新学舎は完成しているため、その頃に測量することは考えられない。よって、この史料は同年までに作成された測量図や調査内容をまとめたものと思われる。

め込まれている⁽¹⁸⁾。図9は正式な商大学舎の平面図、図10は商大杉本学舎の竣工を記念して作られた記念絵葉書であり、本学の大学史研究でよく用いられている史料である。

以上で示したように、土地区画のみならず、商大用地の設定や建物の配置にも変遷があったことが分かる。先に1928(昭和3)年の空中写真(図1-3)を用いて、旧依羅村周辺の様子を紹介したが、杉本学舎竣工後の杉本町の状況を空中から観察できる史料として、1942(昭和17)年に撮影された空中写真が大阪市に所蔵されている。図11に大阪商科大学杉本学舎を中心とする区域について、戦前と現代の空中写真を並べ、比較できるような形で掲載した。図11-1は大きな視野によって地理的景観を把握するために、個別に撮影された写真を筆者が合成して作製したものである。図11-2は、杉本学舎の部分を拡大した写真である。

戦後になると、占領軍や国土地理院、あるいは本学の依頼を受けた民間会社によって空中写真が撮影され、杉本の地域や杉本学舎の変化を肉眼で観察できるようになった。戦前期にも空中写真撮影が各地で実施されていたという記録はあるものの、終戦直後の混乱で散逸してしまっているものが多く、今日まで伝存するものは極めて少ない。この空中写真は、

アジア・太平洋戦争が勃発して間もない頃のもので、空襲の惨禍に見舞われる前の大阪市の状況を知る上でも貴重な写真史料といえる。

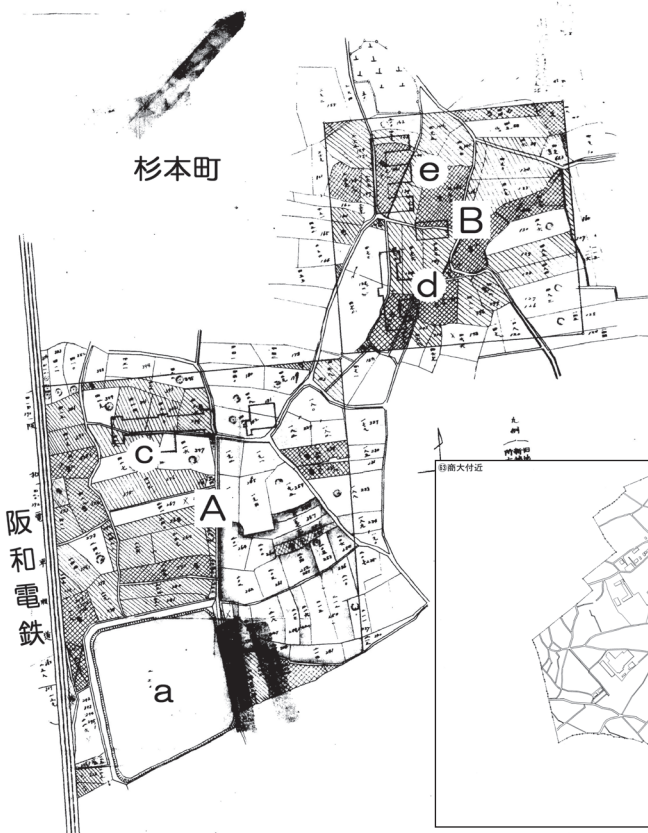


図 4-1 : 「商科大学用地区域図」(一部)

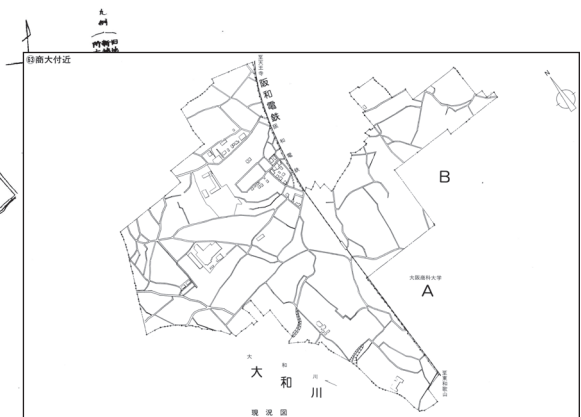


図 5-1 : 商大付近土地区画整理事業 (現況図)

(18) 図6・7ともに絵の右端に描かれているものは、複翼機の翼と翼間支柱、張線であり、杉本上空の飛行機から商大新学舎の様子を見下ろしたという構図である。

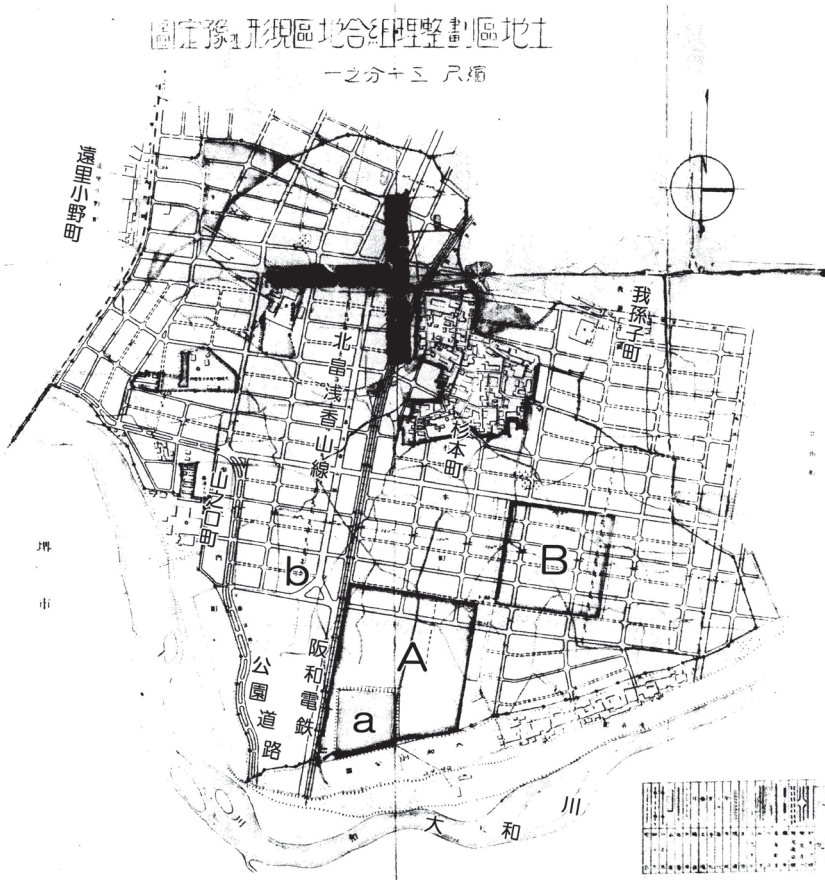


図 4-2：「土地区画整理組合地区現形並予定図」

【図 4・5 凡例】

- A：商大学部予定地
- B：商大予科・高商部予定地
- a：葛原池
- b：丁字路
- c：学部本館（予定）
- d：予科校舎（予定）
- e：高商部校舎（予定）

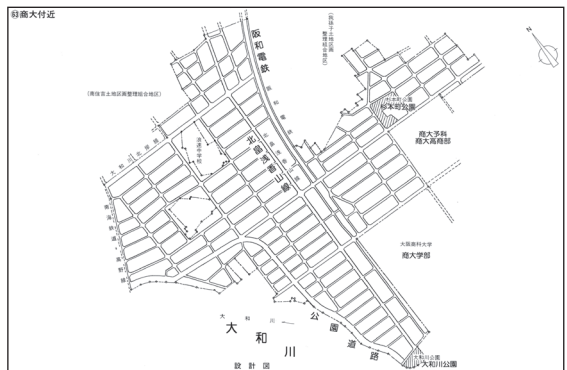


図 5-2：商大付近土地区画整理事業（計画図）

図 4：商科大学関係測量図の一部

図 5：商大付近土地区画整理事業における現況図と計画図

(注) 図 4-1・2：「商科大学関係測量図綴」（1934 年）より。大学史資料室所蔵。図中の記号は筆者が挿入した。図 5-1・2『大阪市の区画整理—地図資料—』（1992 年）pp.126-127 より転載。各図には筆者が加筆している。

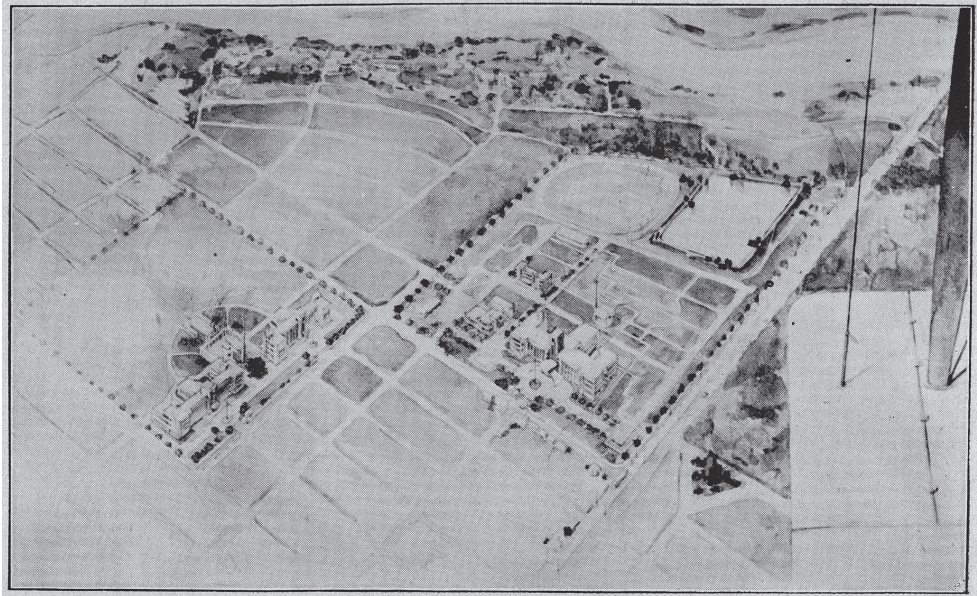


図6：「大阪商科大学一覽」(挿絵)
(昭和4年および5年)

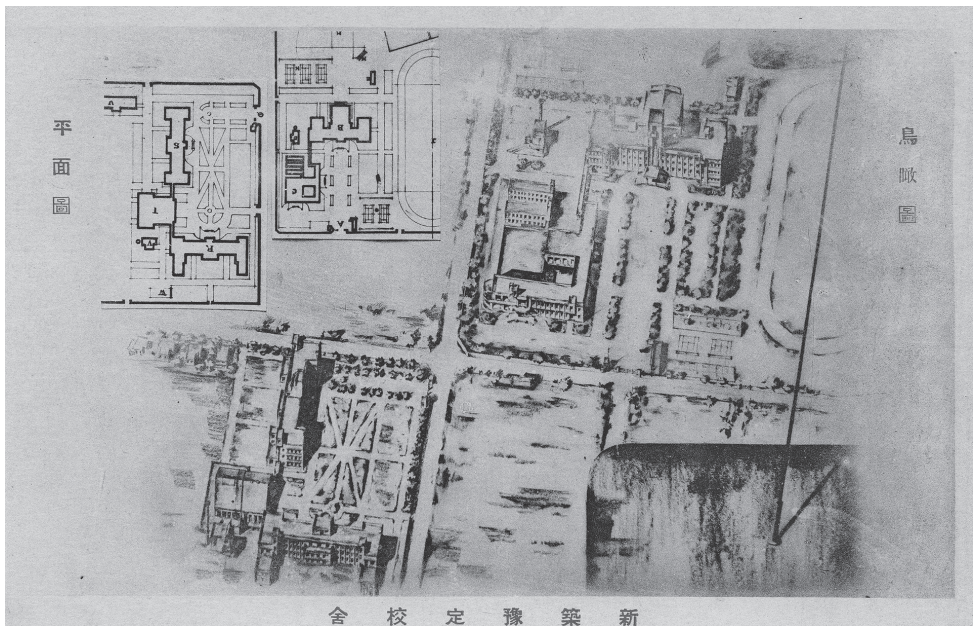


図7：「創立五十周年大学開設記念」(絵葉書)
(発行年不明)

(注) 図6：「大阪商科大学一覽」(1929年)より。同じ挿絵が1930年に発行された一覽にもある。大学史資料室所蔵。図7：「創立五十周年 大学開設記念」より。大学史資料室所蔵。発行年は不明であるが、大阪商科大学創立50周年及び大学開設の祝賀式は1930(昭和5)年11月15日より3日間挙行されたので、その頃に配布されたものと推測される。

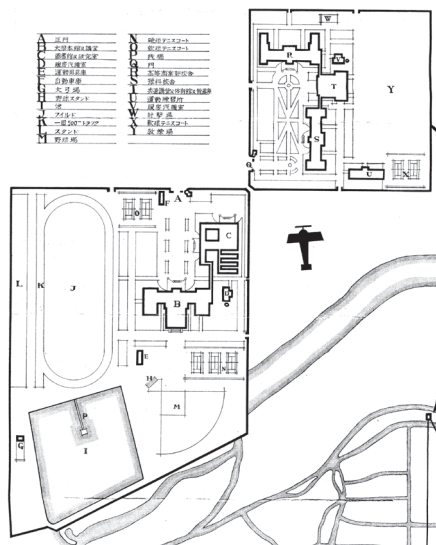


図 8：「大阪商科大学概要」(地図)
(昭和 5 年)

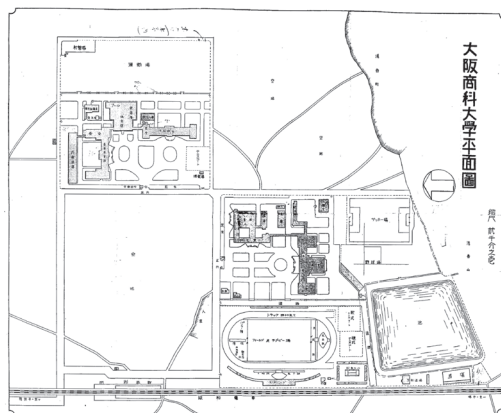


図 9：大阪商科大学平面図
(昭和 10 年)

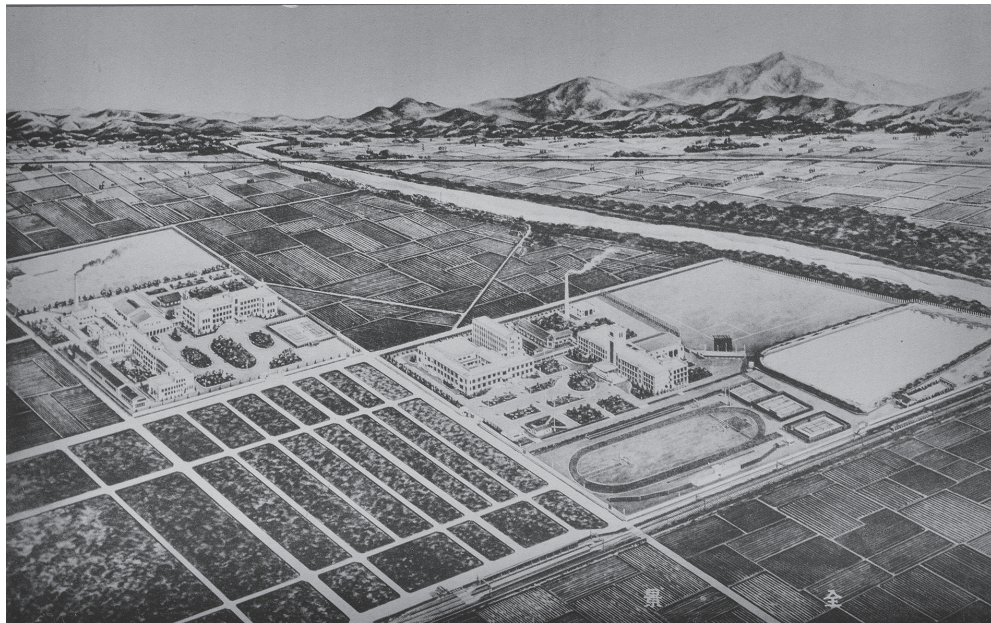


図 10：「新学舎竣工記念絵葉書」(全景)
(昭和 10 年)
(注) 大学史資料室所蔵。



図 11-1 : 1942 (昭和 17) 年の空中写真



図 11-2 : 商大杉本学舎の拡大写真 (1942 年)



図 11-3 : 現在の大阪市立大杉本学舎 (2015 年)

【図 11-2 凡例】：①学部本館 ②図書館 ③書庫 ④経済研究所 ⑤学部暖房汽罐室 ⑥学部グラウンド ⑦高商部校舎 ⑧予科校舎 ⑨体育館 ⑩予科・高商部暖房汽罐室 ⑪武道場 ⑫葛原池 ⑬杉本町駅

図 11 : 杉本学舎の空中写真 (1942 年・2015 年)

(注) 図 11-1・2 : 「大阪市航空写真 (昭和 17 年) 一括」より。大阪市所蔵。図 11-1 は筆者が数点の空中写真を選んで合成加工し、加筆したものである。図 11-2 は図 11-1 の中の商大杉本学舎の部分を取りミングし、加筆したものである。なお、写真縮尺は 8 千分の 1 である。図 11-3 : Google Earth より (方位記号は筆者が加筆)。

3. 杉本学舎の建設および竣工の風景

新学舎が順次着工すると、各部局は次第に移転を開始し、本格的な大阪商科大学の杉本時代が始まる。本章では、田園風景の中に出現した商大新学舎の様子について、資料室保管の写真史料と、当時を記憶している教職員および卒業生が綴った記録を用いて解説する。既に公開された写真には極力頼らず、資料室内に所蔵されながらもこれまで未公開であった写真史料を積極的に活用し、当時の記憶と照合するという構成をとることで、田園地帯に突如出現した新学舎のイメージとその感想を浮き彫りにすることに努めた。

(新学舎の印象)

烏ヶ辻時代の商大校舎は、煉瓦造りのルネサンス風で奥ゆかしい建物といった印象を持つことが多いとされるが、新装の杉本学舎はどのような印象を見る者たちに与えたのであろうか。それを諸文献より拾い上げ、当時の記憶から杉本学舎に対する率直な印象をまとめてみた。

昭和七年、杉本町の新学舎に移転する運びとなり、その工事も順次進み、昭和七年十二月、高商部と予科の校舎が体育館やその他の付属設備と共に出来上がった。共に鉄筋コンクリート三階建て、烏ヶ辻に比してスマートな感じを受けた⁽¹⁹⁾。

校舎は、杉本町の田園の中に新築したばかりの白亜の建物でした。当時は杉本町駅から遮るものは何もなく、一際目立つ威容を見せており、中学校の木造のボロ校舎とは何と違うものかと感じたものです⁽²⁰⁾。

当時はまだ田園風景が残っていた杉本町だったが、野原の中にポツンと建っているコンクリートの校舎は、どちらかといえば工場の事務所のような感じで、樹木の茂る丘陵の中腹にでも建っていれば学園という名にふさわしかっただろうが、それとはおよそ似つかぬものであった⁽²¹⁾。

…高野線汐見橋駅から我孫子前下車、畑の中を歩き杉本町駅の前に、予想していたキャンパスはおよそかけはなれた、粗末なコンクリートの校舎があった⁽²²⁾。

(19) 小島誠「烏ヶ辻と杉本の間」『有恒会百年史』p.174 より。

(20) 須原二郎「高商部の学園」同上書 p.224 より。

(21) 井関一徳「予科の学園」同上書 p.194 より。

(22) 渋谷博彦「私の歩みし道—大阪商科大学時代—」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.165 より。

この他にも多くの記録が存在する（後掲、補足資料のうち「学舎（外観）」参照）が、白く聳える時計塔のある学舎への印象には様々なものがあつたことが分かる。当時としては斬新な建築デザインであつたモダニズムの白亜の建造物を目の当たりにした驚きの感想に対して、第一印象を「殺風景」と表現する感想も幾つか見られた。烏ヶ辻と杉本の学舎と周辺の環境を比較すれば、ルネサンスからモダニズム、煉瓦から鉄筋コンクリート、市中から農村という違いから、それらが相対するような性質であつたことが影響したこともあろう。烏ヶ辻から杉本へ移転した商大学舎は、さまざまな感想に出迎えられていた。白亜の学舎も、遠くの山々まで見渡せる土地に無駄を排した四角四面のコンクリート建造物というコントラストが神々しく感じられることもあれば、工場のように無味乾燥なものを受け取られることもあつたに違いない。

図12は、予科・高商部校舎の区域を撮影した写真であり、建設中および竣工直後の様子をほぼ同じ角度から捉えている。また、図13-1は杉本町駅から商大学舎を撮影した写真であり、現在の理工学系学舎の敷地が一面の畑であつた様子が分かる。図13-2では、現在の本館地区にあたる区域の様子が写っており、学部本館の背後に浅香山の松林が高く生い茂っている。

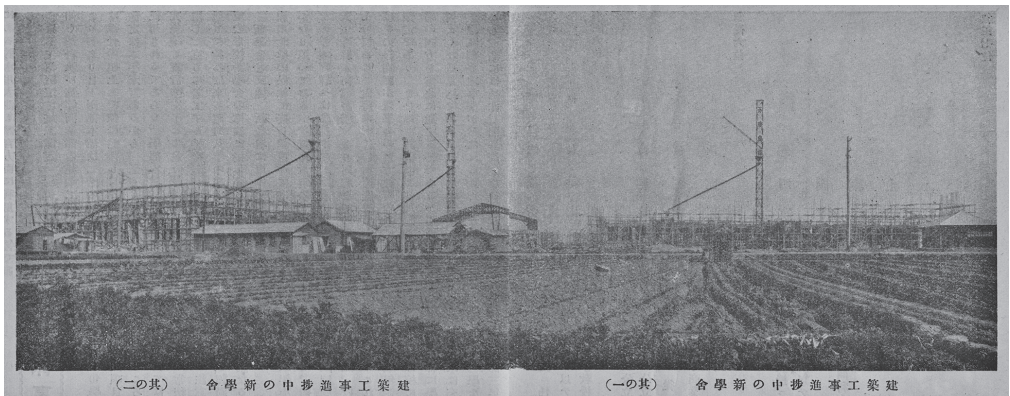


図12-1：建設中の予科・高商部

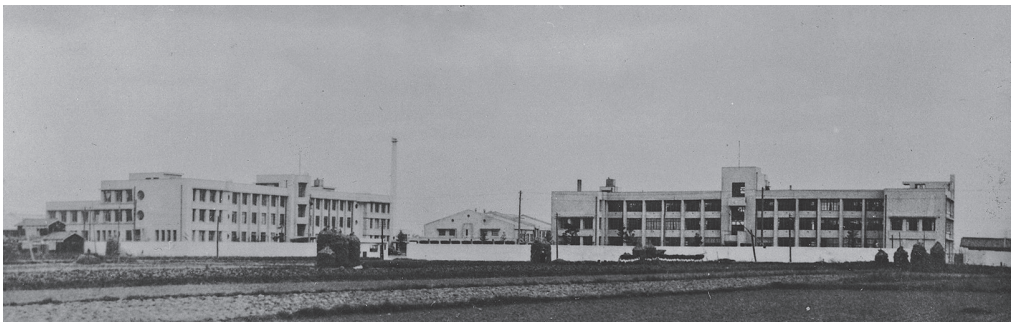


図12-2：竣工した予科・高商部校舎

図12：予科・高商部校舎の建築工事進捗中と竣工後の比較写真

(注) 図12-1：『大阪商科大学同窓会会報』第92号、pp.62-63より。2ページにわたる写真のため、筆者が各写真を合成して加工した。右から建設途上の予科校舎、体育館、高商部校舎となる。図12-2：『大阪市立大学の百年』p.38より。

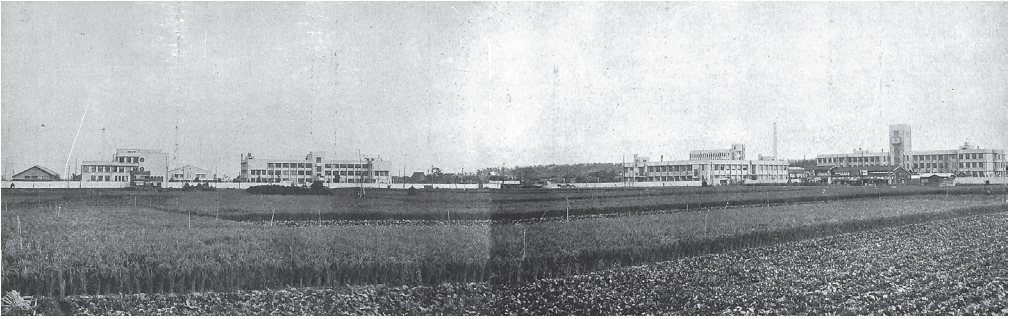


図 13-1：大阪商科大学杉本学舎の全景写真



図 13-2：学部構内の全景写真

図 13：竣工して間もない杉本学舎を撮影した写真

(注) 図 13-1:『建築と社会』19 輯、第 3 号より。2 ページにわたる写真のため、筆者が各写真を合成加工した。杉本町駅から南東方向を撮影したもので、手前にある畑は、現在の理工系学舎の敷地に相当する場所である。図 13-2:『大阪商科大学卒業記念アルバム』(1935 年)より。高商部校舎(旧・三号館)から南西方向を撮影したものと考えられる。手前に予科・高商部の中庭も写っている。

(商大周辺での教練)

広大な面積を持つ杉本学舎はグラウンドの広さにも恵まれており、射撃の訓練を含む軍事教練の場としてよく活用されたようである。また、周辺は人家もまばらな一面の耕作地帯であったので野外演習も時おり実施されていた。1934(昭和 9)年 12 月には、日本陸軍第四師団長であった東久瀨宮殿下の台臨(皇族の出席)のもと大演習が挙行されている。資料室にはこの大演習の様子を鮮明な写真で記録したアルバム『東久瀨宮殿下台臨記念』が所蔵されている(図

14-1)。また、1935（昭和10）年の『大阪商科大学卒業記念アルバム』の中にも、この大演習の写真が掲載されており、その中に刈り取りを終えた周辺農地で演習を行う学生の姿が収められている（図14-2）。杉本学舎の周辺は田畑が広がっていたという記録が数多く見受けられる中で、それを裏付けるような当時の様子を知る貴重な一葉といえよう。

こうした野外での演習は、おおよそ陣地を決めて行われていたようで「当時の軍教は、戦史の話など室内でやる以外は、野外で、大体「浅香町付近より前進する敵を……」といった想定で、杉本町駅付近から東の方へ向かって行動した」⁽²³⁾と卒業生が述懐していることからもうかがえる。東久邇宮殿下台臨の大演習についても、この説明に似た形で実施されていたようである。より詳しい野外演習の様子について大阪朝日新聞が取材している。以下はその記事の内容である。

師團長宮御前に
 學生機晴れの妙技
 擬裝戦車隊、騎乗隊も活躍…
 大阪商大の教練査閲

大阪商科大学の昭和九年度学校教練査閲は十七日東久邇第四師團長宮殿下の台臨を仰いで我國學校教練最初の學生航空隊の参加、擬裝戦車、騎乗隊の活躍など優秀な成績を^(マ)をさめた、

(中略)

學生が東西兩軍に分れ東軍は乗馬の学部三年生多田一雄君大隊長となり大和川右岸海岸近くから東進の敵軍に對し攻撃前進を開始、騎乗隊六騎の敵狀報告に警戒を嚴にして行軍をつゞけるうち、學部二年の久野正雄君學生航空聯盟で鍛へた腕にアヴロ機を驅って東軍所屬飛行隊として城東練兵場を離陸、具さに敵狀を偵察して大隊長の直側に報告筒を投下、地上よりは布板信號により飛行機に各種命令を傳へるなど學生軍とは思へぬ空地の完全聯絡に殿下には特に御目をとめさせられ、次いで東軍が遠里小野町附近で一齊展開に移らんとするころいつたん着陸した久野君は今度は西軍所屬としてR-三型機を操縦、果敢な空襲を行つて腕の冴えを見せ、同十一時前濱口町附近で兩軍衝突 西軍の擬砲二門は殷々の砲聲を轟かせ東軍また自動車部學生の操縦による擬裝戦車を先頭に突撃行つて演習中止となり一同遠里小野橋西北方空地に集合、査閲官平松少將の閱兵を受け更に大隊教練を行つた⁽²⁴⁾

(23) 山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』p.45より。

(24) 「大阪朝日新聞」1934年12月18日夕刊より（聞蔵Ⅱビジュアル）。掲載文は演習の内容について記された部分を抜粋した。筆者が改行して読みやすいようにした。



図 14-1：教練査閲中の一行



図 14-2：学舎周辺で演習中の様子

図 14：東久邇第四師団長宮殿下台臨における教練査閲に関する写真

(注) 図 14-1：『東久邇宮殿下台臨記念』より。大学史資料室所蔵。左より 2 人目が東久邇殿下、中央右の黒いハットとスーツ姿が大阪商科大学初代学長である河田嗣郎。図 14-2：『大阪商科大学卒業記念アルバム』（1935 年）より。大学史資料室所蔵。

(新学舎竣工記念祝賀祭)

高商部および予科校舎、体育館を含む区域（現・旧教養地区）が 1933（昭和 8）年 3 月に、そして学部本館、図書館、書庫を含む区域（現・本館地区）が 1934（昭和 9）年 7 月に竣工した。これと同時に各部局は烏ヶ辻より移転し、最初に高商部と予科、次に学部の運営ならびに授業が杉本学舎において開始された。付帯工事である経済研究所および自動車車庫や門扉、運動施設といったその他工事を含め、最終的には 1935（昭和 10）年 2 月にすべての工事が完了するのであるが、先に各部局が移転を終えた 1934（昭和 9）年には新学舎竣工を祝う記念式典を開催する運びであった。しかし、その年の 9 月 21 日に室戸台風が襲来し、杉本学舎に若干の被害が出たために、記念式典は 1 年延期されることになった。そして翌年の 1935（昭和 10）年 11 月 8 日から 3 日間にわたり新築学舎竣工記念祝賀祭が催された。各種催し物も行われ、新学舎は一般市民にも公開された。この式典の様子についても大阪朝日新聞が取材を行っている。次の文はその抜粋である。

学舎完成の歡び けふ大阪商大の盛儀

經濟都大大阪を象徴する『大阪商科大学』新學舎はさる昭和六年二百五十萬圓の巨費を投じて着工以來滿四年ぶり、いま住吉區杉本町の一角、淺香山の秋色背負ふ白堊の威容整ひ一大カレッヂ・タウンを現出することゝなつたので今八日午前九時から職員、學生ら二千の朗かな歡聲とともに全學舎竣工の祝賀祭を繰りひろげ、よろこびも聲は近世式三階建の明朗校舎の窓・窓からドツとばかり阪南の野にこだました

(中略)

正午より本館屋上のテント張り祝宴場で杯を舉げて祝宴を張った このころ秋色一碧の

爽空には本社飯沼機の祝賀飛行がありメッセージ封入の通信筒を見事に落下、また同校の學生で本社の學生飛行選手権大會でお馴染の空の若きチャンピオン久野正雄君操縦の愛機も懐しい母校の上空を三旋し美しい花束を投げた

かくて午後一時から陸上競技場内で舉行の高商部豫科生の合同體操をトップに午後二時いつせいに全學内を開放し續く九、十の三日間に亙つて祝賀の諸催し——各種學術展、滿支展、假裝行列、演藝大會、趣味の作り物、各運動大會など盛りたくさんのプログラムで行はれることゝなつてをり、十一日は學内大園遊會がある^(ママ)⁽²⁵⁾

また記事にある久野正雄氏による学舎上空の飛行に関しては、大阪市立大学航空部の記念文集の中に、久野機より撮影された周辺地域も写り込んだ杉本学舎の空中写真(図15-1)と、学部本館(現・一号館)屋上より久野機の様子を撮影した写真がある(図15-3)。図15-1の写真は、南西方向の上空より東方面を俯瞰するように撮影されており、新装の学舎群の様子と周辺の風景がよく確認できる。当時の杉本地区の景観を生々しく伝えている写真として興味深いものである。図15-3は学部本館屋上より西方向を撮影したもので、広大なグラウンドと観覧席が見える。このグラウンドは現在、経済研究所棟や文学部棟、法学部棟などが建ち並ぶ場所となっており、観覧席は現在もその一部が残っている。また、その奥にある現在の山之内地区にあたるには農地が一面に広がっている様子を見ることができる。図15-4は大阪朝日新聞社が空撮した当時の現・本館地区の様子である⁽²⁶⁾。学部本館の屋上には、記念祝賀祭のための三角の白いテントの屋根が見える。



図15-1：久野機より撮影した杉本学舎の空撮

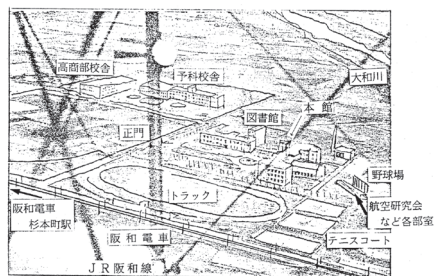


図15-2：図15-1の説明図

(25) 「大阪朝日新聞」1935年11月9日夕刊より(聞蔵Ⅱビジュアル)。筆者が改行して読みやすいようにした。

(26) この空撮写真に関することで、作道・江藤編『夕古城を仰ぎ見て』p.215に「このあと(講堂での本学主催の竣工祝賀会のあと)学部本館屋上大天幕張の祝宴場で祝賀午餐会が催され、祝杯を挙げて本学の隆昌を寿ぐとき、打揚花火頻りに轟き渡り、かくするうちに朝日新聞社の一機が飛来して空より祝意を表し、祝賀気分はいよいよ高揚された」という記述があった。

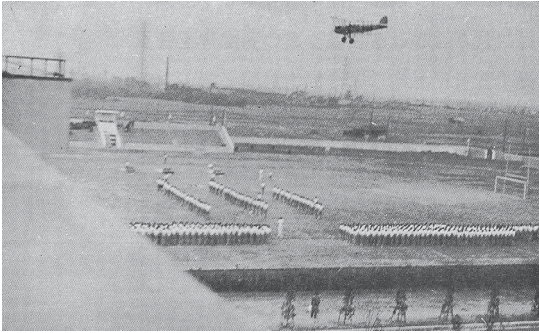


図 15-3：学部グラウンド上空を飛ぶ久野機

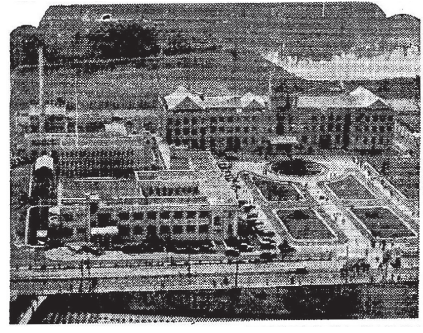


図 15-4：大阪朝日新聞社による空撮

(注) 図 15-1～3：『大阪市立大学体育会航空部創立 60 周年記念文集』（1993 年）p.8・53 より。図 15-4：『大阪朝日新聞』1935 年 11 月 9 日朝刊より（聞蔵Ⅱビジュアル）。

また、記念祝賀祭当日の学内風景については、小島誠氏により撮影された写真が資料室に収蔵されている。当時、商大学部生であった小島氏は⁽²⁷⁾、杉本学舎についての感想も『有恒会百年史』に書き記しており、その記録と写真（図 16）を以下に掲載する。

昭和十年十月、全学の杉本町への移転が完了したので、その年の十一月八日～十一日の間、「新築学舎竣工式と記念祭」が盛大に行われた。長年の夢が実現した感じであった。関市長、河田学長はじめ、多くの来賓、教職員、同窓生、在學生らが喜びを共にした。万国旗で飾られた本館の時計台の晴れ姿は今も忘れられない。ここで初めて「大阪商科大学」が門出したと実感した。

その後、私はこの新学舎で昭和十二年三月まで在学したが、卒業の頃は植樹も次第にその数を加え、野中の学舎にやや緑の色が増えて行った⁽²⁸⁾。

(27) 小島氏は昭和 6 年に高商部に入学し、昭和 9 年の卒業と同時に学部に入學した。卒業は昭和 12 年である。

(28) 小島誠「烏ヶ辻と杉本の間」『有恒会百年史』p.175 より。市民への一般公開や各種催し物がある新学舎竣工記念祝賀祭は 11 月 8～10 日の 3 日間の期間で行われ、11 日は大園遊会が催されている。



図 16-1：記念祝賀祭での学部本館



図 16-2：図書館と書庫、予科・高商部校舎



図 16-3：学部本館2階から正門を望む



図 16-4：図書館と中庭

図 16：小島誠氏撮影による記念祝賀祭開催時の構内風景

(注) 大学史資料室所蔵。

小島氏の回顧の中に、「構内の植樹は学舎竣工以降も行われ、緑が徐々に増えていった」という旨の記述がある通り、構内に植えられたばかりの樹木はまだ小さかった。豊かに葉を生い茂らせるまでには随分と時間を要したことであろう。学舎竣工直後の大学構内は、随分と閑散とした雰囲気であったということが想像できる。図 16 に挙げた写真は保存状態が良く鮮明で、真新しい学舎の姿や構内の風景を見ることができ、小島氏の記録の通りに樹木が少ないことが分かる。学舎周辺の様子も見ることができ、人家がまばらで農地が続く風景が広がっている。

4. 商大杉本学舎の構内および周辺地域

前述したように、商大学舎のある戦前期の杉本町は田畑ばかりであった。そうした農耕地帯という性質から、独特のエピソードが散見された（後掲、補足資料のうち「杉本町（周辺景観）」参照）。例えば肥溜め（野壺）のことである。この肥溜めより漂う香気を取り上げて、「肥臭い（こえくさい）」であるとか「大阪商大というか、この大学は農大やな」という冗談を言う人々もいたそうである⁽²⁹⁾。ある学生が野外演習で誤って肥溜めに落ちてしまい、後に洗濯などして綺麗にはしたものの、何故かその香気がなかなか抜けずに教室内に余香が一時期漂っていたと述懐する記録もあった⁽³⁰⁾。

そうした場所では、喫茶店や映画館、本屋などといった市中ではよくある店舗はほとんどなかった。しかしながら、記録資料を調査していくと何軒かの学生目当ての店舗は存在していたことが分かった。まず、予科・高商部の門前に「おでん屋」があった。複数の記録からその「おでん屋」は大変繁盛していたことがうかがわれ、数多くのエピソードを拾うことができた。また学部正門前には、「うどん屋」や「めし屋」があった。立地は不明であるが、「アカデミ」という店や「堺大福餅」、「(国沖のおじさんが経営する)理髪店」、その他に学生向けの下宿やアパートも数軒あったようである。確かに図 11-1・2 の空中写真と図 13-1 の写真をよく見ると、学舎のすぐ近くに数軒の民家が写っている。特に図 13-1 には学部正門前に長屋風の家屋があり、看板が掲げられている様子が確認できる。恐らくこれが、学部正門前にあったという「うどん屋」や「めし屋」などが入る店舗群であったと考えられる。

そして、杉本学舎の構内の事柄でよく触れられている場所として、大きな溜池のことが挙げられる（後掲、補足資料のうち「学舎（構内）」参照）。当時、現在の本館地区の南西、JR 阪和線沿いには大きな溜池があり、それは「葛原池」という名称であったことが分かっている⁽³¹⁾。葛原池は図 11-1・2 の空中写真でもよく確認でき、また大学構内で大きな占有率を有していたことが分かる。葛原池は終戦直後まで存在していたが、占領軍による学舎接収に伴う改修工事により埋め立てられてしまった。葛原池についての感想は、学舎建設前より幾つかの記録が残されている。それらをまとめると、池の堤は高く見晴らしが良く、散策に適した場所として登場しており、戦前期杉本学舎内の景勝地というべき趣があったと考えられる。また、葛原池では学生が水泳をしたり教職員が魚釣りをすることもあり、地元の子どもたちにとっては格

(29) 高士会「杉本町新学舎入学第一号」『有恒会百年史』p.212などを参照。

(30) 山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』p.45を参照。

(31) 葛原池は1911（明治44）年の「依羅村杉本耕地整理組合」により拡張工事が行われるはずだったが、工事の実施が遅れ、結局揚水蒸気ポンプの設置に留まった（口径10インチ遠心式ポンプ・補助給水ポンプ各1台、コルニッシュ型汽罐・横型単気筒汽機各1基）。この後の大正年間に池の拡張工事は完了し、ポンプも蒸気機関から電力に切り替えられた。『依羅郷土史』pp.123-126を参照。なお、こうした区画整理や溜池工事は元来利水に問題のある事の解決のみならず、畑を水田化するという目的も有していた。

好の遊び場でもあったそうである。杉本学舎の体育館には室内プール（図 17-1）が設置されていたが、シーズンオフにはあまり活用されなかったらしい。この室内プールと葛原池についての思い出を綴った文章を紹介する。

予科、高商部の体育館内に室内プールがあったが、プールとは名ばかりで、長さ二五メートル、巾は三コースしかなく、温水装置がないため水が極端に冷たく（十八度位）、四月、五月は使いものにならなかった。学部の池は各辺二〇〇メートル位ある大きな溜め池で、食用蛙がゲゲーと鳴いている不気味な雰囲気であった。池の中ほどに木製のスタート台らしきものが二つしつらえてあり、その間を往復して泳いだ。もちろんコースロープ等気のきいたものは張っていないから、横っちょへそれてしまうことも稀でなく、タイムを測ることもできない。池の土堤の上に簡単な脱衣場があったが、そこに干してあるタオルや褌がみな盗まれるというハプニングまであった⁽³²⁾。

室内プールの評判は、あまり芳しくなかったようである。むしろ室内プールで過ごすよりは、広い溜池で食用蛙と一緒に泳いだという記録を目にすることが多かった。体育館は予科・高商部暖房汽罐室（ボイラ室）⁽³³⁾に近かったことから「室内プールは温水プールであった」という噂を筆者は学内でしばしば聞くことがあった。しかし、現在までの筆者の調査では、諸文献の



図 17-1：体育館にあった室内プール



図 17-2：葛原池と学部本館を背景に撮られた写真

図 17：室内プールと葛原池の写真

(注) 図 17-1：大学史資料室所蔵。写真には昭和 12 年に撮影されたという付箋があった。図 17-2：『大阪商科大学卒業記念アルバム』（1940 年）より。大学史資料室所蔵。写真右に葛原池、池の向こうに学部本館の背面が見える。写真は葛原池の西堤の上から北東方面を撮影したものである。

(32) 抱喜一「水泳部の思い出」『有恒会百年史』p.198 より。

(33) 体育館北側には予科・高商部暖房汽罐室があった。占領軍からの学舎返還以降より使用されなくなっており、1976（昭和 51）年に解体された。

(34) 『建築と社会』第 16 輯、第 10 号、p.26 には体育館の平面図が掲載されている。その図中にある水泳練習場（室内プール）の注釈には「将来温水プールトシテ使用ス」と記されている。同誌発行は 1933（昭和 8）年である。また、商大時代から占領軍接收期における暖房汽罐室の特徴と変遷、その使用状況などについて調査した、拙稿「大阪商科大学・大阪市立大学の暖房汽罐室の変遷—戦前期・接收期・返還期を通じて—」『大阪市立大学史紀要』第 7 号（2014 年）がある。

中で温水プールがあったという記述はなく、また本学に残されている戦前期から占領期の間に作図された図面の中で、温水化する装置や設備が記されたものを発見できていない⁽³⁴⁾。今のところ、室内プールは当初から温水化の機能を有していないものだったと考えられる。

5. 戦争と商大杉本学舎と学生

杉本学舎が誕生して以降、二・二六事件が1936(昭和11)年2月に発生し、日中戦争が1937(昭和12)年7月、そしてアジア・太平洋戦争が1941(昭和16)年12月に始まり、国内に戦争の影響が広がるなかで、大阪商大も例外なくその渦中に投げられる。学徒の勤労働員が積極的に行われ、1944(昭和19)年の決戦教育措置要綱の決定に伴う授業の停止や就学期間の短縮は、大学の運営や学生生活に大きな影響を及ぼしていった(後掲、補足資料のうち「戦争と大学」参照)。

一般に日本海軍による学舎収用と大阪海兵団の開設は広く知られるところであるが、大学構内に高射砲陣地が設置されたこと⁽³⁵⁾、また戦局が不利に傾くにつれて食糧難に悩まされることになり、大学構内のグラウンドを区割りして、芋作りに精を出したということがうかがわれる⁽³⁶⁾。テニスは敵性スポーツ、軟弱スポーツと見なされて、コートは芋畑に転用され、庭球部は事実上の活動停止に追い込まれたという記録もあった⁽³⁷⁾。また、敵機襲来のサイレンが鳴ると、御真影や教職員、学生が地下室へ避難することもあったという⁽³⁸⁾。地下室とは現在の一号館の地下書庫のことであると推察される。当時の「大阪商科大学学報」の記述から、大学構内では幾つかの空襲避難場所が決められており、その中には地下書庫のほかに暖房用暗渠も指定されていることが分かった⁽³⁹⁾。暖房用暗渠をどのように防空壕として活用していたかについては不明である。

ここまで教職員および学生の実体験に基づいて綴られた記録の集積から、戦前期の杉本学舎とその周辺を再現してきたが、最後にそれらとは雰囲気が異なる記録をここで留めておきたい。

冒頭に述べた通り、戦局の悪化は杉本学舎での修学を不可能なものにした。戦争の終結により杉本学舎は、いったんは大学の手に戻ったが間もなく、占領軍による接収の憂き目に遭い、市内にある複数の小学校校舎に移らざるを得ないという状況となり、大阪商科大学(後の新制大阪市立大学)は「分散学舎の時代」に入る。こうした戦中・戦後直後の期間における学生の思い出には、杉本学舎に対する独特の感想が見受けられる。すなわち、杉本学舎での思い出が

(35) 栗田達男『有恒会百年史』p.273 ほかより。

(36) 実方正雄「法学部設立の風土」『有恒会百年史』p.329 ほかより。

(37) 石田弘「大阪商科大学予科の頃」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.45

(38) 平尾順一『有恒会百年史』p.296 ほかより。

(39) 暖房用暗渠については、拙稿「本学本館地区旧暖房用暗渠の調査」『大学史資料室ニュース』第19号(2015年)の中で詳しく述べている。

ない、あるいは希薄であるという卒業生が大勢いたということである。そうした卒業生は「最も恵まれなかった世代」と自らを捉え、「白亜の学舎が入口で焼け跡の校舎が出口であった」として、流転の学生生活を自嘲する記録もあった⁽⁴⁰⁾。こうした経験は、母校や杉本学舎に対する意識に卒業した後になっても少なからず影を落としている。杉本学舎での思い出がない世代に対し、驚きと同情を持つ先輩方が居た一方で、「君は本当に商大を卒業したのか」と冗談めかしく問われ、それ以降は同窓会への出席をためらう卒業生も居たようで、腹立たしさとともに悲しさをも感じさせられる。このように、本学の分散学舎の時代を経験した卒業生は「同窓という意識の中に学舎にまつわる思い出を共有したという要素は相当大きなもの」という記述も残しており、その言葉の重みと学生生活における場所の意義について改めて考えさせられる⁽⁴¹⁾。

そして、特に印象に残るもう1つの記録がある。予科に入学したものの陸軍への入隊が決まり、その報告の折りに体験した職員とのやりとりの思い出である。

第二次大戦の末期の事情から、予科入学式は延期されていた。その直前にかねて覚悟していた陸軍への入隊を命じられたので、報告^(マ)労々挨拶のため杉本町の学校に行った。少数の職員があるだけの(学生は勤労働員)、殆んど無人に近い校舎に入り、訪問の要件を伝えた。

面談した係員は「入隊お目出とう」と型通りの挨拶の途、「入学式は済んでいなくとも貴方は当大学の学生ですから、在学証明書を出します。又、これが予科の校章です。差し上げますので帽子につけて入隊してください。学校のことも何時でも思い出して貰う為に、この機会に校舎も案内しましょう」と、大学本館の中を丁寧に案内してくださった。多分、若くして死んで行くであろう青年に、せめてもの学生時代の思い出を饒げよう——との親切な配慮をその背後に感じながら、言う言葉もなく付いて廻るだけであったが、この事は今でも自分の記憶に強く残っている⁽⁴²⁾。

この思い出を綴った小池氏は陸軍入隊直後より、ある見習士官からよく面倒をみてもらったという。帽子の校章から小池氏が商大予科生であると、その見習士官が見抜いたことが縁で、自分が高商部出身であること、そして小池氏の配属先小隊の上官であることを告げたそうである。入隊後よりその見習士官からは、学生時代の恩師や学校行事の思い出を懐かしそうに話してもらったようで、小池氏はそのことを「学生生活を懐かしみ、そして後輩に対して持つ優しみの感情であり、学生出身でなければ理解できない思いが見習士官にはあったのだろう」と回

(40) 松本幸郎「ミナミの学舎」『有恒会百年史』p.335より。

(41) 奥村茂次「分散校舎あれこれ」『有恒会百年史』p.335 および太田昭「杉本町学舎を知らぬ卒業生」『有恒会百年史』p.338を参照して記したが、『有恒会百年史』第4章、第3節の「分散学舎」(pp.333-358)では、杉本学舎で学べなかった卒業生の心情がたくさん綴られている。

(42) 小池一男「予科入学当時の思い出」『わが青春の予科』pp.46-47より。

願している。終戦後、この見習士官（この時は少尉に任官）から復学を強く勧められ、小池氏は商大予科に戻るのであるが、以前に見習士官から聞き及んだ話の内容が、学生生活を送る上でよく反映されたそうである。

このような記録は、杉本学舎をよく知る他の卒業生のそれと比べると独特なものがあり、とりわけアジア・太平洋戦争中に在学していた学生は、まさしく青春時代を戦争によって翻弄されたのであった。あまつさえ、内地の空襲ないし戦地で戦死した無念の学生も居たことを考えると「最も恵まれなかった世代」の心情を察するに余りあるものがある。

戦後、杉本学舎は占領軍により接収され、「U.S ARMY CAMP SAKAI」・「279th GENERAL HOSPITAL」といった軍事施設と化した。その接収の一部解除と学舎返還は、1952（昭和27）年より始まり、完全返還は1955（昭和30年）まで待たなければならなかった。その間に戦後の学制改革によって大阪商科大学は旧制となり、その後身となる大阪市立大学が返還後の杉本学舎に本拠を置き、総合大学として発展していく⁽⁴³⁾。また大学周辺の杉本町は、農地から宅地へとその用途を転じ、市街地化が急激に進み、現在の都市景観を形成するに至る。前述したかつての田園風景の空間と、商大杉本学舎に流れた時間は、容易く想像できないほど見事なまでに変貌を遂げてしまったのであった。

おわりに

本稿では、商大杉本学舎の杉本町への移転前から終戦直後までの期間に焦点を当てて、戦前期杉本学舎の姿を、当時の記憶を留めた諸文献や本学と地域に関する資史料、未公開を含めた写真などを合わせて再現することを試みた。戦後の大阪市域の都市化の進展は目覚ましいものがあり、現在の杉本町あるいは大阪市立大学キャンパスの現状から、戦前期の杉本町と商大杉本学舎の姿を想像することは極めて困難であるが、当時の記憶と写真をありのままに活用した当時の再現という中で、戦前期大阪商科大学杉本学舎への興味と関心をさらに深めてもらえれば筆者にとって喜ばしい限りである。

そもそも地域調査において聞き取りは、重要な手法ではあるが、本稿で扱った時期は、もはやこの手法を採るのは難しく、当時を綴った記録で代替する必要がある。またそれは、膨大な文献資料から調査の目的に沿った記録のみを抽出するという作業が必然的となる。そして、それらの記録と写真などの関係する資史料とを照合し、推敲することではじめて再現することができるのである。本稿を執筆するにあたり、その準備作業に数カ月を要したが、幸いにも大学史資料室には当時の記憶を綴った多くの記念誌や文集が収蔵されていたことが調査の進捗に大きく貢献した。また自身が資料室研究員として勤務しているという立場から、数多くの原資料を検分する機会に恵まれたこと、また本学文学研究科地理学教室に在籍していることで地形図

(43) 新制大阪市立大学の創設は1949（昭和24）年であり、旧制大阪商科大学の閉校は1953（昭和28）年である。

や空中写真の活用や分析に難なく取り組めたことが幸運であった。

筆者は本稿の執筆を通じて、かつて杉本学舎に在籍し、そこで経験した記憶が文献資料として存在していることは、地域調査の手段という視点だけでなく、歴史的事実を紡ぎ合わせるという意味で、実に有用性に富むものであると再認識している。すべての関係者が、思い出を綴る機会に巡り合うという訳ではないが、さまざまな経験を記憶に留めてもらい、そして形として残す契機を持ってもらいたいと願っている。それぞれの世代が有している記憶を記録として残す作業は、今後、長く杉本にあってその歴史を刻むであろう本学がその歴史を伝えていくために、また、時を経て現在が過去となり、未来の本学がその立ち位置を振り返る時にも、再考に資する素材として役立つに違いない。

(まつもと ひろゆき・大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程・大学史資料室研究員)

【参考資料】(年代順)

〈大学史資料室〉

- ・「大阪商科大学一覧」(1928年・1929年)
- ・「大阪商科大学概要」(1929年)
- ・大阪商科大学同窓会編集部『大阪商科大学同窓会会報』第87～98号(1929～1935年)
- ・「大阪商科大学関係測量図」(1934年)
- ・「東久邇宮殿下台臨記念(写真アルバム)」(1934年)
- ・『大阪商科大学卒業記念アルバム』(1935年)
- ・小島誠「学舎落成記念写真」(1935年)
- ・「新学舎竣工記念(絵葉書)」(1935年)
- ・大阪商科大学六十年史編纂委員会編『大阪商科大学六十年史』(1944年)
- ・『有恒会七十年の歩み』有恒会創立七十周年記念誌(1960年)
- ・山崎隆三『依羅郷土史』大阪市立依羅小学校創立八十五周年記念事業委員会(1962年)
- ・有恒会創立八十周年記念誌編集委員会『有恒会創立八十周年記念誌』(1971年)
- ・作道好男・江藤武人編『夕古城を仰ぎ見て 大阪市立大学商・経・法学部九十年史』(1972年)
- ・大阪市立大学『大阪市立大学の百年』(1980年)
- ・『有恒会報』第113号(1985年)
- ・大阪市立大学『大阪市立大学百年史』全学編、上巻(1987年)
- ・有恒会百年史編集委員会『有恒会百年史(1890～1990)』(1990年)
- ・渡邊雅美『信太山からラーダまで』(1990年)
- ・山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』(1991年)
- ・クラス会文集刊行委員会編集委員『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』昭和十五年度

大阪商科大学予科入学同級生予科修了五十周年記念文集（1992年）

- 『大阪市立大学体育会航空部創立 60 周年記念文集』（1993年）
- 大阪市大硬式庭球部 90 年史編集委員会『大阪市大硬式庭球部九十年史』（1995年）
- 予科二十三年記念誌刊行委員会『わが青春の予科』大阪商科大学予科修了五十周年記念誌（1998年）
- 『大阪市立大学剣道部創部百周年記念誌』（2005年）
- 『大阪市大硬式庭球部九十年史』（2005年）
- 小林一雄『大阪商大での思い出－先生方と友人たち－』（発行年不明）
- 「創立五十周年・大学開設記念（絵葉書）」（発行年不明）

〈その他〉

- 大阪府東成郡編『東成郡誌』大阪府東成郡（1922年）
- 蒲原隆次『南大阪編入記念誌』南大阪編入記念誌発行会（1925年）
- 日本建築協會会編『建築と社会』19輯、第3号（1936年）
- 「大阪市航空写真（1928年・1942年）」大阪市所蔵
- 『日本地誌』第15巻、大阪府・和歌山県、二宮書店（1974年）
- 竹内理三ほか『27 大阪府』角川地名大辞典、角川書店（1983年）
- 『大阪府の地名』日本歴史地名大系、第28巻、平凡社（1986年）
- 大阪市都市整備協会『まちづくり 100 年の記録 大阪市の区画整理 一地区資料一』（1992年）
- 太田孝編著『幕末以降市町村名変遷系統図総覧②』東洋書林（1995年）
- 木方十根「大阪商科大学学園計画の都市計画上の位置づけについて」日本建築学会計画系論文集、第582号（2004年）
- 木方十根『「大学町」の出現 近代都市計画の錬金術』河出書房（2010年）

〈新聞〉

- 聞蔵Ⅱビジュアル（朝日新聞データベース）
- 毎索（毎日新聞データベース）